

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第 5 号】
平成 29 年
8 月 31 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

教育フォーラム 2017 で伝えた

「共有したい話」

教育長 勝又 将雄



◇新二学期制の『二学期』が始まっています。「学級びらき」「授業びらき」が担任の先生方の一味違う「仕掛け」から展開されてきていることを願っています。『充実の二学期』の活動が始動しています。

◇七月末に実施した教育フォーラムは、先生方の研修と同時に「教養」を深めていただく機会を保障し、特別ゲストとなる講演会を設定しています。今回の平野啓子さんの「語り」はいかがでしたでしょうか。毎回、特別講演の前に市長の挨拶と教育長基調講話を入れて運営しています。今回、

あえて配布冊子の紙面とは異なる内容と話を加えました。「目で読む」ことと、「耳で聞く」ことを意識して、耳で聞くことを伝えて、その後の平野さんの講演につなげようと思いました。

改めて過日耳で聞いた内容を、活字でおさらいしてみてください。

○清水寺貫主 森清範さんの『観音の慈悲心』という話。

小学生の女の子は、深い穴に落ちた友だちの危急を告げに走ってきて、「つ言います。「友だちが高い穴に落ちた！」。

穴に落ちた女の子を助け上げた先生たちは、口々に「高い穴でなく深い穴だね」と言い合ったといっています。

しかし、一人担任の教師だけは「それでいい」と言いました。

今回、この少女の友だち思いについてではなく、それを理解して毅然と言えるこの学級担任にスポットを当てました。

○もう一つは、脚本家の倉本聰さんが住んでいた北海道の友達の話。『馬の涙』というタイトルです。

北海道では、かつて農業に活躍していた馬がたくさんいました。

しかし、その馬は、トラクターの導入で急速にその役目を失っていきました。

その時期の馬と飼い主の物語です。

飼い主の名はヒラさんといっています。ヒラさん一家は、長年連れ添って老いた馬を手放す気持ちにはなれず、年月が経っていました。その馬を家族の一員として深く愛していたからです。しかし、その馬は随分と年をとってしまいました。そして、愛する馬の死を見るに忍びないという家族の意見で、馬はどうとう売られることになったのです。

馬を手放すその前日に、家族は馬に「馳走をしたらしい。そのご馳走が馬に悟らせた。翌朝、トラックが馬を迎えに来、主(あるじ)が馬を馬屋から引き出すと、突然馬は敷居口で止まり、主の肩に頬をすり寄せた。

家族はハツとしたそうである。馬が涙を流していたのだ。大粒の涙を流していたのだという…。

ヒラさん一家は動けなかった。全真胸つかれ石化していた。

と、突然馬は自ら動きだし、もう後ろを見ず、踏み板を渡ってトラックの荷台へと上って行ったという。

… 倉本さんは友達の話、ヒラさん一家の話をご書きつ、

「この話に僕は胸を突かれる。馬と、人間と、その双方に、である。」と、文を閉じます。◇この二つの話を、この数年間いろいろな会合でのあいさつの中で取り上げてきました。学校関係者以外の皆さんに「難しい教育」という固い話ではなく、心にすくと落ちる「小話」を心掛けてきました。

実は先生という職業は、単なる社会人、大人という立場ではありません。年齢、男女問わずに、「先生」と尊敬のまなざしで見られています。それゆえに、経験が未熟で年齢も若い時にはそれこそたくさん読書により、ベテランになればさらにその豊かな体験を加味して「自分磨き」をします。お父さん、お母さんとも、地域の大人とも異なる、尊敬される存在の「先生」として、教育にまい進しています。学級担任も、学年主任も、ましてや校長先生方も、いろいろな機会に、心に染み入るような、児童生徒たちの目が「らんらんと輝くような」、保護者にも納得されるような、「とおきのお話」を心掛けているものと思います。授業に先生

方の「脱線話」があります。「本線」あつての脱線なのですが、不思議なことに子どもたちは「脱線話」を強い印象をもつて記憶しているものです。道徳に登場する「説論」の場は「先生方の生き方・生き方姿勢が問われています。本市のすべての先生方に、「いい先生」、「いてもらわなくては困る先生」に成長(向上)的変容と言います)してもらおうことが念願です。

「人事管理訪問」が始まります。学校の、先生方の教育活動を見つめて、よりよい御殿場市の教育を展開したいとと考えています。

教育フォーラムを 振り返って

七月二十六日、御殿場市民会館等において市教育フォーラム2017を開催しました。市内公立幼・小・中学校教職員約四百五十名と、私立幼稚園や保育園・こども園・託児所等職員約三十五名が加わり、市内の教育・保育に関わる約五百名が一堂に会し、終日、研修に励みました。今年度も、「子ども一人一人

の未来を拓く教育を目指して」を大会テーマとして、午前の部の全体会では、若林洋平市長の御挨拶、教育長の基調講話、はごろも『夢』教育講演会を行い、午後は四つの会場に分かれて分科会を実施しました。

市長様には、教職員や教育に対する思いを直接お話しいただき、力強いエールを送っていただきました。教育長からは、豊富な資料提供とともに様々な趣旨の話がありました。また、御殿場市の教職員は、心身ともに健康で、「いなくてはならない」先生でいて欲しいという熱いメッセージを受け取りました。

・市長や教育長の話を年一回聴く大切な場だと思ふ。全体の意識向上にもつながる。
・「御殿場の教員として」と気持ち持が引き締まった。地域のことをよく知り、御殿場の子どもたちを育てていきたい。
・教師のいろは「の話に気を引き締める一方で、ここまですべて具体的に踏み込んで話さなければならぬ背景について考えさせられた。

といった感想が寄せられました。



参加者全員による「御殿場市歌」斉唱

はごろも『夢』教育講演会は、語り部・かたりすとの平野啓子氏を講師に招き、「語り」の扉が世界に大きく開かれた！言葉輝く！珠玉の名作富士山を日本文学の語りで紹介」と題し、御講演いただきました。美しい衣装で登場した平野氏の、美しく明瞭な声や言葉、そして凛とした立居振る舞いにより、会場は一瞬にして「語り」の世界に引き込まれました。

「語り」と「朗読」の違いを聴いた後の『蜘蛛の糸』の実演では、自分が抱いていたイメージとはまた違う情景を想像することができ、聴くた

けでなく観ることによって「語り」を楽しむことができました。実は、『走れメロス』の語りについては、前日に急きょリクエストしたので、早く盛り込んでくださいました。

その他、竹取物語と富士山との関連や外国における富士山の話など、興味深いお話をたくさん伺うことができました。参加者の感想を紹介します。

・語りの面白さ、素晴らしさ魅力を感じることができて良かった。もっと語りをたくさん聞きたかった。
・語りと朗読の違いを実演してくれたので、違いがわかりやすかった。語りの世界に引き込まれ、語りの素晴らしさを実感できた。
・語る相手を意識し、自分の心で、自分の思いを込めて伝える、表現することだということを感じ、納得できた。教育者の自分たちに必要なことだと思ふ。
・相手意識を高めるとは、相手への思いやりと自分の思いを伝える強さのバランスを取るのだと思った。聞き手理解し子ども理解に通

じており、授業改善のヒントになる。

・言葉の大切さ、日本語の美しさ、富士山の素晴らしさに改めて気づくことができました。

・グローバル化する社会の中でもっと御殿場や富士山、地元の良さを知っている子、わかっている子を育てていくことが大切であることを学んだ。



今年度で教育フォーラムも五回目を終え、改善・充実を図る節目を迎えました。

・十年間で約四割のベテラン教職員が退職し、多数の新規採用教職員が赴任する大幅な人事交代期であること
・産休、育休代替等の臨時講師の増加
・活力ある学校組織の構築
・教員や保育士を自前で育てない限り、御殿場市の教育の質の向上は図れないこと
このような本フォーラムを

起ち上げた経緯を継承しながら、今日の教育課題にも対応しうる、充実したフォーラムにしていきたいと考えています。今後も、実行委員会、教育指導センターをはじめ、多くの皆様方に御協力いただき、「御殿場市教育フォーラム」を育てていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【渡辺 英一郎】

A分科会 (特別支援教育)

部会 兼 第一回御殿場市特別支援教育研修会では、静岡県教育事務所地域支援課 亀壮晴指導主事を講師に迎え、講義「発達特性のある子どもへの支援や家庭、地域、外部機関との連携の在り方」と、「個別の指導計画の作成と活用」の演習を行いました。

講義では、個別の教育支援計画と個別の指導計画の違いや、作成の意義、根拠などを確認しました。また、その後の演習を通して活用に向けての手立てを考えることができました。以下、参加者の感想です。

・ 個別の支援、指導計画の作

成に当たり、一人ではどうすればよいか困ることが多い。今回の演習で、まずアセスメントが必要なことや、正しくアセスメントする方法、行動目標の立て方、到達目標(長期目標)、支援目標(短期目標)の捉え方など、大切なポイントが確認できてよかった。

・ 教師側が困ること、問題と判断するのではなく、本人のニーズ、困り感を解決していくことが大切だと改めて感じた。マイナスを変え

るより、プラスを増やしてマイナスを軽減するという考え方が参考になった。実際に計画を立てたことで色々な視点で一人の子を見ることができた。自分だけでは思い浮かばないポイントにも気付くことができた。発達特性のある児童生徒の苦手を本人、保護者、園や学校で共有することで、見通しを持った支援が可能になります。本研修を生かして、個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用し、効果的な支援につなげていくことを期待します。

【秋岡 智子】



B分科会 (不登校対応部会)

部会 兼 第二回不登校等研修会では、静岡県・御殿場市スクールソーシャルワーカーの和田昌子先生を講師に迎え、模擬ケース会議を行いました。この演習には、スクールカウンセラー、学校教育相談員、市教育相談員、市特別支援教育巡回指導員などの立場の方々に加え、教育指導センター指導員、子育て支援課家庭児童相談室、社会教育課青少年センター、子ども家庭センターなどの関係各機関の方々も参加しました。

これまで、不登校対応と言えば、不登校状態にある児童生徒への自立支援が中心でし

た。しかし、近年、新規不登校児童生徒数が継続不登校児童生徒数を上回る状態が続いており、自立支援だけでは不登校対応は十分ではないという考え方に変わってきています。不登校児童生徒の自立支援を進めながらも、新たな不登校児童生徒を生まないために、出席している全ての児童生徒に目を向ける必要があります。そこで、今回の演習は、不登校の兆しが見えている児童に対してのケース会議演習を行いました。以下、参加者の感想です。

・ 異校種の先生方や専門機関の方と一緒に演習できたので、自分とは違った角度の意見が聞けて、大変参考になりました。

・ 今回の演習で取り扱った子どもや家族と同じような問題を抱える子どもがクラスにいます。自分がどう動けばよいか、目の前が明るくなった気がします。

・ アセスメントシートの記入方法、ケース会議で話し合う内容、会議の時間配分など、演習を通して学びました。

・ 幼稚園では不登校について

のケース会議をすることはありませんが、就園支援会議などに活用できそうなので参考にしました。

・ 不登校になる前の対応が大事だと改めて思いましたが、プランニングの難しさも感じるので、夏の間目標を考えたと思います。

この演習を通して、不登校の未然防止と初期対応の大切さを認識すると共に、実効性の高いケース会議の進め方について学ぶことができました。参加者が自校に戻り、この演習で学んだことを生かして、未然防止と初期対応に視点を当てた不登校対策に取り組んでくれることを願っています。

【石田 善正】



C 分科会 (幼保こ中連

携部会)は、「幼小中十二年間を見通した教育に向けて」指導者の意識改革」をテーマとして、高根愛郷会館で研修会を行いました。内容は、教育指導センター 芹澤ゆき子指導員による講義、御殿場市立西中学校 勝又一浩先生による発表、参加者による研究協議です。

芹澤指導員の講義は、「子どもの育ちを培う幼保こ中連携」として、教育指導センターから見た幼小接続の現状や指導のポイントについてでした。小学一年生の担任から聞き取り調査したアンケートや芹澤指導員自身がこれまでに観察・指導してきた事柄について、具体的な子どもの姿を示した分かりやすい話でした。そして、その現状「幼児期に身に付けた資質・能力を小学校へどのようにつなげたらよいか」「学習指導要領改訂にもなう幼児期に育ってほしい姿⑩をどのように捉えたらよいか」等、多様な視点から多くの指導や助言をいただきました。

勝又一浩先生には「西中校

区が取り組む魅力ある学校づくり」として、西中学校区が取り組んでいる国研・市指定研究の概要を説明していただきました。全国的な課題となっている「不登校者数の増加問題」を日常の教育活動を通して改善していく取組は、どの参加者にとっても共感できるものでした。特に、PDC Aサイクルを年間計画に位置付け、児童生徒の意識調査を基にした分析や幼小中の連携の在り方には、各学校が参考とすべき内容が多数盛り込まれていました。

「子どもの伸びる芽に気付ける眼を教師全員が持てるようになりたい」と思いました。西中学校区の取組が今後どうなっていくのか大変興味を持ちました。今後の実践で行われる具体的な取組もぜひ教えていただきたいと思えます。そして、本校でも応用していきたいです。

これらは参加者の感想の一部です。また、研究協議では、幼児教育と小学校との接続や小中学校間における魅力ある学校づくりを議題として意見交換を行いました。短い協議時間でしたが、参加者同士が

思いを述べ合ったり情報を共有し合ったりして、充実した時間となりました。

本研修をきっかけとして、参加した先生方の周りから、さらに深い協議や共有がなされることを期待しております。

【丹澤 謹志】

D 分科会 (学校安全部会)

では、クレーム対応研修を行いました。研修事業を主軸に全国展開している株式会社インソースより片岡真由美氏を講師に招き、「保護者・地域からの期待に応えるスキル習得編」を実施しました。

「こんな対応をしてくれるだろう」という事前期待よりも現状に不満を感じた時にクレームにつながります。様々なサービスの発達に伴い、事前期待の水準も上がっている中で、クレームの発生する可能性も高まっています。クレマーに対して「心情理解ができない」「言い訳をしまう」、どんなクレームが発生しているのか「事実の確認ができない」ことが、クレーム対応が上手にできない三つの理由だそうです。電話を受け

た場合、(早く電話を切りたい) (自分の担当ではないから) といった気持ちは、すぐ声や話し方に表れてしまい、初期対応で失敗してしまうことが多いのだそうです。

このようなクレームに対し、四つの基本手順を教えてくださいました。

- ① 当事者の意識を強く持つ
- ② 保護者の心情を理解し、そのことを行動で示す
- ③ 解決すべき問題・要望の確認を行う
- ④ 問題の代替案・解決策を冷静に提示する

この四つの基本手順の中でも、一番重要なのが②の「心情理解」です。不快な思いをさせたことに対してお詫びをする、困っている事実に対して共感する、相手の話を聴くことがポイントになります。信頼関係をつくる話の聴き方として、事務的に聞くのではなく、態度・表情・声を使って全身で聴く。相槌・クッション言葉(例:恐れ入ります)がよろしければ等)・うなずき・復唱等を使って聴く。最低でも三分間聴くといいことも教えていただきました。

受講された方々の感想を紹介いたします。

・クレーム対応の基本や具体的手順を理解することができた。

・資料がまとまっていてわかりやすく、今後も活用できそうです。

・ロールプレイもあり、具体的な対応が理解できた。ロールプレイの代表が上手だった。

・今まですぐに言い訳してしまっていたが、相手にたくさん話してもらったことが大切。情報をメモに残すことなど、勉強になった。

・保護者と良い関係を築くことが子どものためにもなると思うので、クレームを拒否するのではなく、上手に対応できるようにしたい。

様々な事情によってクレームは生まれますので、マニュアルどおりにいかないことも多いと思いますが、組織の一員として、誠意をもって、相手の立場に立って対応すれば、少なくともクレームの肥大化は防げるはずです。各校・園において、研修の成果が発揮されることを期待しています。

【渡辺 英一郎】